刊行にあたって

本書は、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」による採択課題「アジアにおける薬用植物資源の生産・流通と情報・表象：資源知形成の比較・関係史」（代表：岡田雅志、2021 年度）の成果報告である。本研究課題は、同拠点事業の 2019 度採択課題「アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究：モノから見るグローカルヒストリー」、2020 年度採択課題「アジアにおける薬用植物資源の広域市場流通と地域社会の資源利用の歴史的相関に関する研究」に続き、アジアの薬用植物資源がいかに生産・流通・利用されてきたかについて、学際的な研究を行い地域社会と広域世界との連関を解明することを目的としたものである。

ここでいう薬用植物資源というのはいわゆる漢方薬で処方される生薬原料である（生薬自体は動物・鉱物由来など多岐にわたるが植物由来のものが大宗を占める）。自然由来の生薬は、その賦存が自然環境に規定されると同時に、消費サイドも、気候変動などの環境変化に大きく左右される。さらに、漢方薬のように、特定の医療知識体系に基づいて利用され、流通する。したがって、薬用植物資源に着目することによって、関係する地域間に横たわる社会、文化、経済の諸側面や自然環境の変容など様々な要素が見えてくるのである。

2021 年度の研究においては、資源の生産・利用に関する様式・知識と、資源及びそれを生み出す自然に対する認識・価値観を総合した「資源知」をキーワードとして、薬用植物資源を通じた地域間関係及び比較の視点から研究を進めた。感染症対策として、下記の通り計 4 回の研究会をオンラインで開催し、学際的議論を深めることができた。

第 1 回研究会　2021 年 7 月 30 日

第一部　薬用植物関連の研究成果

「朝鮮人参」（辻大和）、「当帰・萱草」（柳澤雅之）

第二部　情報共有

「諸国産物帳索引データベース」、「薩摩藩薬用植物園訪問報告」（共に柳澤雅之）

第 2 回研究会　2021 年 9 月 16 日

報告 1： 岡田雅志（防衛大学校）「近世ベトナムにおける薬用植物の資源知形成：東アジアの交流と比較の視点から考える」

報告 2 ：小田なら（東京外国語大学）「ベトナムにおける薬用植物の情報化：シナモンの事例」

第 3 回研究会　2022 年 1 月 15 日

報告：石橋弘之（早稲田大学）「くすりの産地の環境史～鈴鹿山脈南麓、甲賀の近現代から」

コメント：阿部大地（佐賀県立博物館・美術館）

第 4 回研究会　2022 年 2 月 7 日

報告 1：遠藤正之（立教大学）「17 世紀のカンボジアにおける交易産品と交易勢力」

報告２：岡田雅志（防衛大学校）「紀行文に見る近世日本の植物資源認識と薬用植物：『日本漢詩紀行篇』を手がかりに」

第３回研究会では、共同研究ユニットメンバーである報告者の石橋氏の発案で、甲賀で里山再生に関わる活動を行っている中島教芳氏、市川ゆきひろ氏、滋賀県立大学の高橋卓也氏にも参加いただき議論を行うことができた。また、2022 年３月３日～６日に鹿児島県で現地調査を実施し、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、鹿児島県立図書館における文献調査のほか、薬用植物の普及活動を行っている薬草の杜（鹿児島県伊佐市）で訪問調査を実施した。こうした活動を通じて、今後、地域社会の取り組みとの協働により、現代における資源知再生に共同研究の成果を活かしてゆく可能性を見出すことができた。

上記の第3、４回研究会の報告内容を中心にまとめられた本書は、薬用植物が地域社会の歴史の中で経済・文化資源としてどのように利用され、価値形成が行われてきたかを考察したものである。第１章（石橋）は、近代化過程における甲賀の薬業の展開に注目し、自然環境、在来の宗教文化（山伏）、近代における交通網の整備、製剤技術の発展などが絡み合って地域の製薬、売薬業が勃興したことを示すと同時に、現代の地域活動に薬の歴史文化がどのように生かされていかるかを考察する。続く、第２章（遠藤）は、カルダモンなどの薬用植物資源を産するカンボジアについて、17 世紀における交易品と交易勢力をオランダ語史料に基づき整理、考察したものである。薬用植物資源をめぐって市場間競争が激しくなる 18 世紀以前において薬用植物が主要な交易品として認識されていなかったことが興味深い。第３章（岡田）は、複数存在する薩摩地域の博物学年表の統合を行ったものである。日本列島と他のアジア地域を結ぶ窓口のひとつとして、近世以降、様々な薬用植物が往来、定着した薩摩では、独自の本草学・博物学が発展し、一部にはそうした知的伝統を継承したこともあって地域の自然史・博物学の研究成果が豊富である。博物学年表の統合により薩摩における生物資源とそれをめぐる知の歴史を通覧することが可能となっている。

本書のディスカッションペーパーとしての性格上、執筆者の間で用語法や見解に相違があっても統一はしていない。また、本書は、科学研究費補助金（若手研究、課題番号 19K13366）研究課題名「近世から現代までの東南アジア山地民の移動が国家にもたらした影響に関する研究」の助成を受けた研究成果の一部でもあることを申し添える。

最後に、上記研究会で貴重な報告を行い、また議論によって研究を大きく前に進めてくれた共同研究ユニットメンバー、鹿児島調査でお世話になった多くの方々、コロナ禍の中で共同研究を力強くサポートしてくださった東南アジア地域研究研究所 CIRAS センター事務局の皆様に心よりの感謝を申し上げたい。

2022 年３月

岡田雅志・柳澤雅之